青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」
自己肯定感向上プロジェクト

石川縦断キャンプ「ACTIVE2018」
－「自己肯定感を高め、主体的に生き抜く子供の育成」を目指して－

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立能登青少年交流の家

【事業のポイント】
①石川県の自然環境を生かした事業展開
②選択コースの設定（フォトオリエンテーリング、能登島選択ルート）
③県内公立施設との連携
④ねらいを明確にしたプログラムデザインの工夫
⑤振り返りの充実といいとこ見つけ
⑥自己肯定感の育成のためのプログラムの工夫
⑦活動と評価の一体化

1. 企画

（1）事業実施の背景

現代の子供たちは、快適な生活の中で過ごすことが多くなり、全力を出して活動する機会が少なくなっている。また、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造が大きく変化している時代においては、目の前のことに対し主体的に判断し行動する力が必要とされている。「ACTIVE2018」では、これからの激動の世の中を生き抜く力の基礎を育てることを目指す。長期宿泊体験や全力で取り組む活動を通して、共通の目標に協力して取り組む力、課題に対してねばり強く取り組む力、物事に積極的に働きかける力等を育成し自己肯定感を高める。併せて、事業の成果・課題を発信し、青少年教育の振興に寄与する。

（2）ねらい

（1）長期間の移動型キャンプを通して、他と関わりながら困難な状況を克服したり、自ら考え判断したりする経験を積み、自己肯定感を高める。
（2）集団での活動を通して、他に支えられている自分に気付くとともに、決まりやルールを守り、力を合わせて共通の目標に向かうことの大切さを学ぶ。
（3）事業の運営を通して、県立施設との連携の有り方を探るとともに、職員の資質向上に資する。

2. 実施概要

（1）実施主体（運営体制）

推進委員会

委員長：	筑波大学	教授	坂本　昭裕
委　員：	石川県教育委員会生涯学習課	社会教育主事	奥村　康一
	石川県立白山ろく少年自然の家	専門員	野口　理
	石川県立白山青年の家	専門員	宮永　正則
	石川県立能登少年自然の家	課長補佐	奥　敏彦
	国立能登青少年交流の家	企画指導専門職	釜谷　剛
		企画指導専門職	堀田　俊宏
		事業推進係	成清　裕史

（2）開催実績

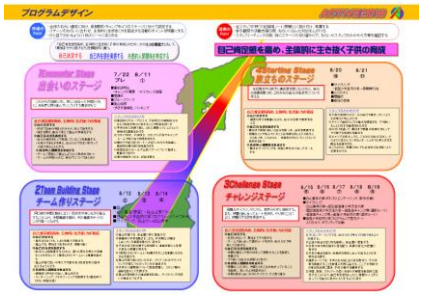
月　日	内　容
7月22日(日)	○事業説明　○実習「アイスブレイク」 ○実習「サイクリング」 ○事前アンケート
8月11日(土)	○開講式　○実習「アイスブレイク」 ○実習「登山の準備」
8月12日(日)	○実習「白山登山」（県立白山ろく少年自然の家～別当出合～白山室堂）
8月13日(月)	○実習「白山登山・下山」 （室堂～山頂・御前峰～別当出合～県立白山ろく少年自然の家）
8月14日(火)	○実習「イワナつかみ体験」「サイクリング約20km」 （県立白山ろく少年自然の家～県立白山青年の家）
8月15日(水)	○実習「フォトオリエンテーリング」「野外炊飯」
8月16日(木)	○実習「サイクリング約78km」（県立白山青年の家～国立能登青少年交流の家） 台風のため約19km走行後中断

8月17日(金)	○実習「サイクリング約45km」 （国立能登青少年交流の家～能登島・松島オートキャンプ場）
8月18日(土)	○実習「サイクリング約74km」（能登島・松島オートキャンプ場～能登少年自然の家）
8月19日(日)	○実習「大型カヌー」（県立能登少年自然の家） ○実習「レクリエーション・ふりかえり」（県立能登少年自然の家）
8月20日(月)	○実習「サイクリング約34km・ふりかえり」（県立能登少年自然の家～禄剛崎） バス移動 （禄剛崎～国立能登青少年交流の家）
8月21日(火)	○実習「ふりかえり」（国立能登青少年交流の家） ○閉講式

（3）具体的な取組の概要

○いいとこ見つけで肯定的なフィードバック

4つのステージ制の中で自己肯定感を高める具体的な手立てを考え、プログラムを主体的に取り組める工夫を行った。「やり遂げる力」を支える3つの機能「自己決定・自己存在感・共感的人間関係」を通して、その取り組みと評価の一体化を図った。子供たちは毎日の振り返りの中で、考えて行動し、最後まであきらめないという自己決定ができているのか。また、仲間との協働の中で自分が役に立っている、支えらてているという自己存在感が感じられているかなどを、自己評価していく。こうした振り返りをしていくことで3機能の評価を高め、自己肯定感の向上へと結びついていくと考えた。そのため、自己存在感の評価として「自分が役に立っている」「仲間から支えられている」という観点を取り入れた。



○いいとこ見つけで肯定的なフィードバック

自己肯定感を高めるためには、肯定的な関わりが欠かせない。そのような関わりをスタッフからだけではなく、子供達同士で行うことで、さらに関係が深まり、一体感が生まれる。そこで「いいとこ見つけ」を取り入れ、相互評価として、自分のいいところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらった。このことにより自分が役立っている、仲間支えられているという実感が高まり、自信になり、自己肯定感の向上につなげることをねらいとした。

○自己肯定感尺度と評価

自己肯定感尺度の評価項目は、自己肯定感を構成する3つの因子（自己決定、自己存在感、共感的人間関係）をもとに設定した。自己肯定感を評価するために、児童には５８項目からなるアンケートを実施した。調査はキャンプ前とキャンプ最終日（事後①）、終了１か月後（事後②）の３回実施した。また、保護者は５８項目、保護者は２０項目からなるアンケートを実施した。調査はキャンプ前とキャンプ終了１か月後に実施した。

（4）新たな青少年体験活動の推進方策の検討と試行

・活動と評価の一体化で自己肯定感の向上が示された。児童・保護者・担任のアンケート学校現場でも活用し、汎用性を高める。
・自己肯定感の向上が見られた児童の、学校生活や家庭生活でのその後の成長の見取り。（3か月後、半年後、1年後など）
・体験学習で培われた自己肯定感と学力向上との相関。

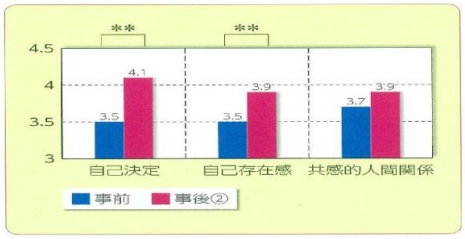
３．成果と課題

（1）事業成果

・児童自己評価の１要因被験者内分散分析から、事前から事後①にかけて自己肯定感に有意な向上が認められ、事後②においても得点の向上が維持され、キャンプに参加した児童の自己肯定感はプログラムによって向上し、1か月後もそれが維持されたことが分かる。また、視点取得では10%水準で、苦痛共有感では5%水準で有意差が認められた。これは、困難なプログラムを通して仲間で協力しながらつらい体験を乗り越えていったことで向上したと考えられる。

評価点の統計

＊キャンプ中の３つの機能、１１の観点別の評価点の平均をグラフに表すと、下のような推移が見られた。



１要因被験者内分散分析

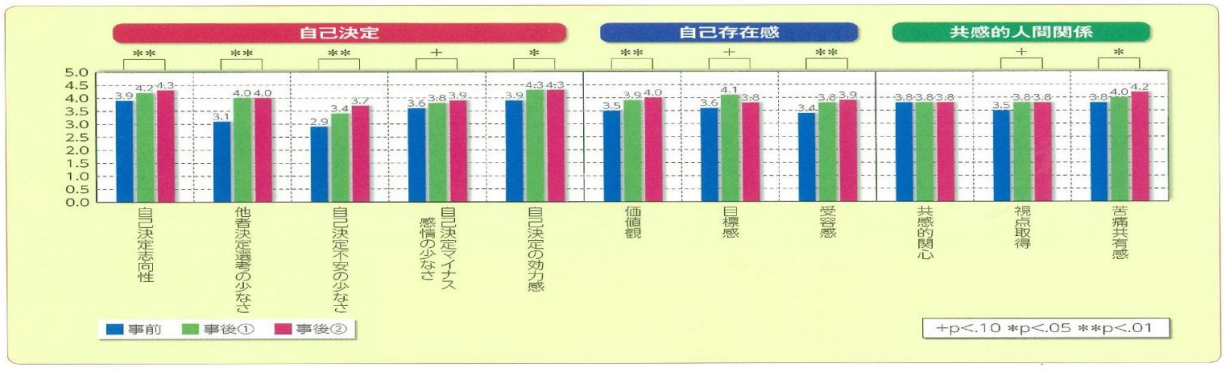
＊下の表１は児童の評価点をもとに、１要因被験者内分散分析を行った結果である。

表１　自己肯定感の比較（児童）

	事前		事後①		事後②			
	M	SD	M	SD	M	SD	F	
①自己決定	70.56	7.42	78.81	9.08	81.31	9.61	20.96	**
②自己存在感	66.56	10.83	74.50	9.88	74.00	10.08	14.42	**
③共感的人間関係	70.18	9.98	72.43	7.72	73.43	7.99	2.33	ns

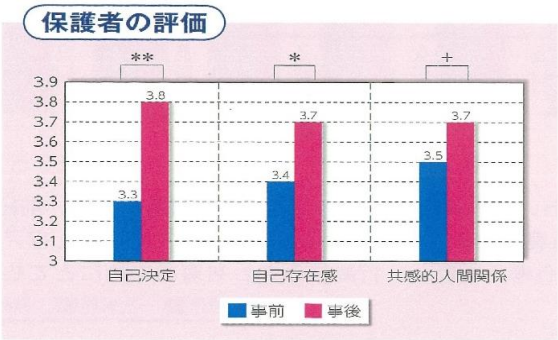
+p<.10　*p<.05　**p<.01

①自己決定、②自己存在感において１％水準で有意であった。③共感的人間関係においては有意差は見られなかった。「自己肯定感の向上」において１％水準で有意であった。

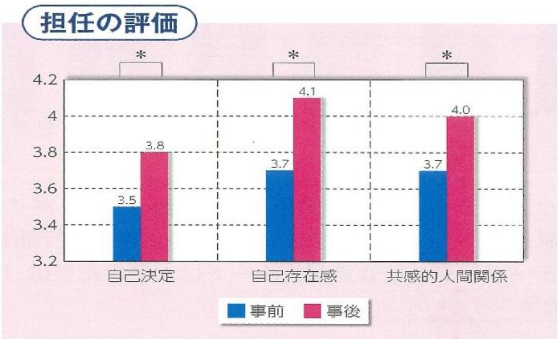


・保護者・担任評価のt検定から、どちらも事前から事後にかけて自己肯定感に有意な向上が認められた。キャンプに参加した児童の自己肯定感はプログラムによって向上し、1か月後もそれが維持されたことが分かる。また、保護者では「自己決定」が一番大きく向上している。これはキャンプでの主体的に考えて行動することが自己肯定感の向上により、家庭でも自信をもってできていることを表していると言える。

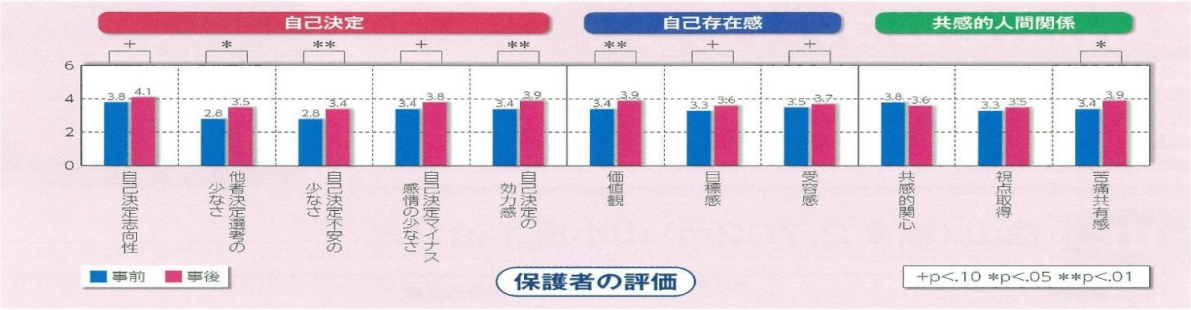
保護者の評価

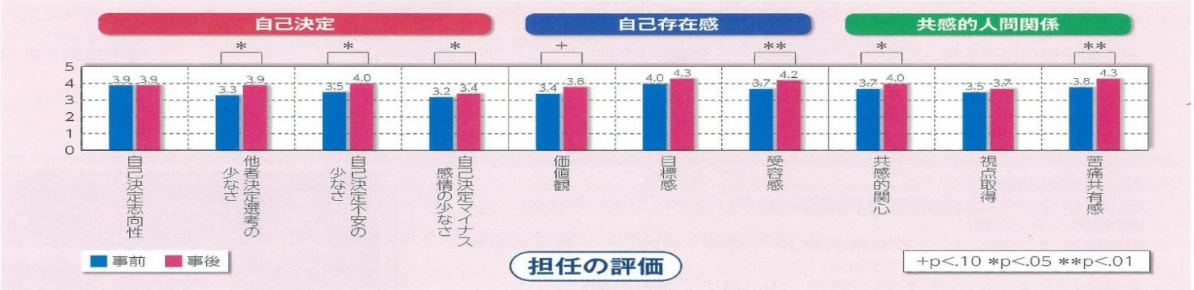


担任の評価



+p<.10 *p<.05 **p<.01





1要因被験者内分散分析

＊下の表1、2は参加者の保護者と担任の評価点をもとに、t検定を行った結果である。

表1　自己肯定感の比較（保護者）

	事前		事後			
	M	SD	M	SD	t	
①自己決定	63.31	11.10	75.43	11.56	21.18	**
②自己存在感	64.62	13.07	70.43	14.68	7.55	*
③共感的人間関係	66.37	4.07	69.43	7.71	3.56	+

+p＜.10　*p＜.05　**p＜.01

表2　自己肯定感の比較（担任）

	事前		事後			
	M	SD	M	SD	t	
①自己決定	27.92	3.57	30.85	2.47	7.00	*
②自己存在感	22.21	3.34	24.57	2.66	7.06	*
③共感的人間関係	22.00	3.40	23.92	3.53	5.42	*

+p＜.10　*p＜.05　**p＜.01

保護者では①自己決定において１％水準で、②自己存在感において5％水準で、③共感的人間関係において10％水準で有意であった。
「自己肯定感の向上」において１％水準で有意であった。
担任では、①自己決定、②自己存在感、③共感的人間関係において５％水準で有意であった。
「自己肯定感の向上」において１％水準で有意であった。

・自己肯定感を高めるために、生徒指導の3機能を用いた評価の手法は有効であった。特に、自己決定の機能における評価の上昇が、自己存在感、共感的人間関係の機能の評価の上昇につながり、主体的に活動し自信をつけながら段階的に自己肯定感を高めていったと考えられる。
・ねらいを明確にし、4つのステージ制の中で自己肯定感を高める手立てを考え、主体的にプログラムに取り組める工夫を行った。活動のねらいをスタッフ・参加者が共有し、ステージのねらいに沿った活動を仲間と協力しながら、粘り強く最後までやり遂げることができた。
・県内の公立3施設と連携し、事業のねらい等を共通理解することで、組織的に事業を作り上げることができた。

（2）事業運営上の課題
・自己肯定感を見取る評価を事前と事後で実施したが、それぞれの評価の相関性の見取りやこのキャンプを通して培った力が学校生活や家庭においてどのような変容が見られたか、継続的に調査するなど、評価の在り方を探っていきたい。 ・各ステージごとに重点的に高めたい力を意識し、それに合わせたプログラムを検討していくことが必要である。 ・登山やサイクリング行程において天候や時間の遅れにより、計画の変更が必要な場面がある。安全面での危機管理マニュアルの事前準備や、各施設との連携を密にした支援体制等を、より整備していく必要がある。
（3）事業成果の普及啓発の課題
・自己肯定感の向上につながる体験活動やプログラムの工夫を、学校現場に報告し、体験活動の推進につなげること。

4. 団体プロフィール

〈里海・里山の能登〉

能登半島の入口にあたる羽咋（はくい）市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境をもつ眉丈台地に位置する能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海・里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。

豊かな森と水に囲まれた
国立能登青少年交流の家

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立能登青少年交流の家

【TEL】0767-22-3121
【FAX】0767-22-3125
【メール】noto@niye.go.jp